

講演2

西洋古代における死とその表象

東北大学大学院 芳賀京子

キリスト教が支配的となった四世紀以降、西洋世界の死生観は大きく変化した。人は死ぬ。だがキリスト教の教義では、信仰ある者はやがて復活の日にその肉体も蘇り、天国の神のもとで「生きる」のだと信じられている。魂の長い道行きの中で、身体の死はその中間点に過ぎない。だからこそ埋葬に関しては、生者から死者を隔離することよりも、死者がより容易く天国に入れることが重視される。死者の身体は、その来るべき日に備えて土葬されるが、六世紀以降に聖人の遺骸が町中の教会に埋葬されるようになると、すみやかな復活を願う信者たちもまた、聖人のそばに土葬されるようになる。死者の身体の埋葬方法や埋葬場所は、人々の死生観と密接に結びついている。

キリスト教に先立つ古代ギリシア・ローマ世界では、密儀や一部の思想を除けば、基本的に復活や輪廻の考えはなかった。人々は死者を愛しい者として記憶し、彼らが安らかであることを願ったが、おそらくそれ以上に、死者が生者に害をなすことを恐れてもいた。天国や極楽のような、死後の楽園は存在しない。もちろん死者の魂は存在し、亡霊も出現するが、それ相応の埋葬の儀式によって宥められた死者の魂には生前の「自己」は残ってはいない。人々は自己を保ったまま天国に至ることではなく、自己の意識が残らないということに「安らかな死」を見出していたように思える。

古代ギリシアとローマはどちらも多神教であり、神々にもある程度の対応関係が確立されていたが、宗教や風習がまったく同じであったわけではない。地域や時代によっても異なるが、ギリシアではどちらかという土葬が多く、ローマでは（少なくとも紀元後2世紀初頭までは）火葬が主流であった。しかしいずれにせよ、葬儀は死後の魂にとってことのほか重要なこととみなされていた。

ギリシアの葬儀では、死者の身体を清め、衣を着せて飾りつけた上で、最後の別れのために3日間ほど自宅の寝台に寝かせるという「遺体安置（プロテシス）」の儀式がおこなわれた。その後、遺体は町の外の埋葬の場所へと運ばれ、墓穴を掘って埋葬される。貴族制の社会では目を見張るように豪華な葬式が営まれることもあったが、アテナイでは紀元前594年のソロンの立法によって葬式の方法や副葬品までが細かく制限された。埋葬後は9日目、13日目、30日目に墓参りをし、供物を捧げる。時には美しい墓標や墓碑が立てられることもあったが、墓室を有するような建造物は一般的ではなかった。

死者の魂は死後、魂の導き手であるヘルメス神に連れられ、はるか彼方、地下深くにある冥界（ハデス）へと向かう。そしてカロンの渡し船で三途の川（ステュクス）を渡るのだが、葬儀が執りおこなわれなかった魂は「ハデスの館」に入ることができず、亡霊としてさまようこととな

る。

神話文学ではなく、実際に亡霊が「出た」という話も伝えられている。オルコメノスでは、岩を持ったアクタイオンの亡霊が土地を荒らしたため、人々は神託に従い、アクタイオンの遺骨を見つけて埋葬し、その亡霊のブロンズ像をつくって鉄の鎖で岩に縛り付けた。そして毎年、彼に英雄としての犠牲式を執りおこなったという。

つまり、亡霊（エイドロン）は実体のない影のような存在ではあるが、どうやら生前の姿を保っているようである。哀哭の儀式を経てしかるべく埋葬されたならば、死者の魂（プシュケ）はハデスに入り、苦痛のない状態に至る。知力も気力もとどめず、「夢みたように、体を見捨てふらふらと飛び交う」存在となるのである。だが埋葬されなかった死者の魂は宥められることなく亡霊としてさまよい、ついには祟ることもある。

「亡霊」と「ふらふら飛び交う魂」という二つの状態は、白地レキュトスと呼ばれる副葬品の香油壺などに描かれた死後の世界にも見て取ることができる。ヘルメスに連れられハデスに向かう死者は、生前の姿そのままに表されている。あるいは、ハデスに入ることができない亡霊も、やはり人間としての姿をとどめている。一方、苦痛のない状態に至った魂は、羽の生えた小さな人の形の影として描かれ、蝶のようにひらひらと宙を舞っている。この差は、死者の身体の状態に対応しているように思われる。土葬された遺体は、1ヶ月もすれば土に還り始める。身体が消滅するとともに、魂も苦痛から解放され、恨みやしがらみに縛られていた自我も消え去るのであろう。

これに対しローマでは、マネスという生前の人格を維持していない魂の集まりのようなものの存在が信じられていた。パレントリア祭やレムリア祭は、マネスを宥めるための死者の祭である。一度、パレントリア祭が行われなかった時などは、火葬の熱でローマの気温は上がり、亡霊たちのうなり声が街角に響き渡ったというから恐ろしい。

マネスという魂の集合体の他に、もちろん個々の死者に対しても手厚い供養がおこなわれた。故人のことを記憶に留めるだけでなく、古くはデスマスクをとることもあり、後には大理石やその他の石を用いた肖像彫刻が熱心につくられた。葬式は大筋ではギリシアと同じで、遺体は寝台に安置され、その後、葬送行列となる。上流階級に属する人物の場合、この行列は泣き女や楽隊、先祖代々の肖像なども伴う豪華なもので、町の広場で死者を顕彰する演説がおこなわれた。埋葬はギリシア同様、町の外と決められていた。埋葬後は清めの期間であり、9日目に正餐をおこなって一連の葬儀は終わりを告げる。死者の誕生日や命日にも、墓では一族そろって宴会が催された。死者の供養において会食は重要な役割を担っていた。豪勢な墓の中には宴会の席や台所が備わっているものもあったほどである。

ローマでは死者の魂は基本的に墓所に止まっていたらしい。だから生者は死者と交流するために墓参りをし、食事を共にした。そのためか、ローマ人は墓の建設とメンテナンスについてはギリシア人よりも遙かに熱心だった。富裕者は生前に立派な墓をつくり、墓の管理について遺言状に書き付けた。あるいは、同業組合や軍の部隊、葬祭を共同でおこなうことを目的とした組合な

どに加入していたならば、その組合所有の集合墓に葬られた。コルンバリウム（鳩小屋）と呼ばれる建物内部の壁面につくられたたくさんの壁龕に、石でできた遺骨容器や、ガラスや土器の骨壺が安置されたのである。壁龕は、個別で購入することもできたらしい。こうして、それほど豊かでない者や身寄りのない者も死後の安心を得ることができたのだった。

家族の墓や集合墓には壁画や彫刻が施されたが、そこには死後の世界の表現はほとんど見当たらない。死者はもっぱら、生者と向き合う肖像として表現された。それは彼らが生者に記憶されることを何よりも望んだからなのだろう。その一方で、髑髏や骸骨のような、キリスト教の「死を思え（メメント・モリ）」という思想を思わせる図像もある。しかしこれは、だから禁欲的に生きろという教えではなかったようだ。ローマ人の墓碑にはNF F NS NCという略語が散見するが、これは「私がかつて存在せず、そののち存在し、そして今は存在していない。私は何も思い悩まない」という意味である。骸骨の図も、死んだら何もないのだから今を楽しめ、という意味だったのだろう。

2世紀のハドリアヌス時代以降、ローマでは火葬が急速に廃れ、土葬が増加する。この変化がどうして起こったのか、確かなことはわからないが、宗教的理由ではなく、社会的変化によるものだという考えが最近では一般的である。これにともない、裕福な死者のために豪華な浮彫で飾られた石棺が数多くつくられるようになった。表されているのは、多くの場合はギリシア神話の一場面である。ローマ人はギリシア神話の英雄に死者をなぞらえることで彼らを顕彰し、同時に死者の領域を美しく飾ろうとしたのだった。